法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-08-10

小説『ひめゆりの塔』の原点 ： 石野径一郎日記の1945（昭和20）年3月10日、6月26日、8月15日

NAKAYAMA, Yutaka / 中山, 豊

(出版者 / Publisher)
HOSEIミュージアム
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
HOSEIミュージアム紀要 / BULLETIN OF HOSEI UNIVERSITY MUSEUM
(巻 / Volume)
5
(開始ページ / Start Page)
57
(終了ページ / End Page)
74
(発行年 / Year)
2025-03-10
(URL)
https://doi.org/10.15002/00031411

＜研究ノート＞

小説『ひめゆりの塔』の原点
―石野径一郎日記の 1945（昭和 20）年 3 月 10 日、6 月 26 日、8 月 15 日―

中山　豊

はじめに―石野径一郎日記の発見

最近、筆者は小説『ひめゆりの塔』の作者として知られている法政大学出身の小説家石野径一郎が書いた 1945（昭和 20）年と 1982（昭和 57）年の日記帳 2 冊を入手する機会に恵まれた[1]。

これらのうち、1945 年日記は石野が 36 歳の時に記されたもので、その一部は『ひめゆりの国』（石野 1968b）の中で引用されており、代表作『ひめゆりの塔』をはじめとする石野が戦後に発表した沖縄文学作品の原点となる貴重な資料と考えられた。また、石野が 73 歳の時に書いた 1982 年日記には 1945 年日記に記されていない 1945（昭和 20）年当時の記述がみられ、1945 年日記を補足する資料と捉えられたのである。

個人の日記が歴史的な資料的価値をもつことはすでに知られているが（永監修 1995、河邑編著 1995）、本稿で対象とする石野径一郎日記も沖縄・日本近現代史資料として貴重な記録であることはいうまでもない。

筆者は、こうした石野径一郎日記がもつ資料性を考え、戦後 80 年の節目となる年に石野径一郎の沖縄文学作品を理解する上で特に重要と考えられる 3 月 10 日、6 月 26 日、8 月 15 日の記述を中心に日記から選び、石野ゆかりの法政大学から発信させていただくことにした[2]。

1．石野径一郎と法政大学

石野径一郎は 1909（明治 43）年、現在の沖縄県那覇市首里寒川町に生まれた（石野 1972）。直木賞候補作品『沖縄の民』に掲載されている「著者略歴」には、「昭和七年法政大学高等師範部卒業」（石野 1956b）、『旺文社文庫　ひめゆりの塔』巻末の「年譜」には、「一九二九（昭和四）二〇歳。四月法政大学高等師範科に入る。」（石野 1972）と記されている。石野が法政大学高等師範科に入学したのは、1926（大正 15）年 3 月に沖縄から上京して 3 年後の 1929（昭和 4）年 4 月であった（前掲）。入学の翌年は現在の法政大学校歌が誕生し、秋には東京六大学野球で新校歌が初披露されて初優勝を果たした年にあたっている（HOSEI ミュージアム・コア、法政大学史委員会・法政大学史センター編 2016）。

また、「年譜」には「一九三一（昭和七）二三歳。三月法政大学高等師範科卒業、ただちに国文科入学の手続きをすませる。」（石野 1972：238 頁）と記されており、石野が草創期の法政大学日本文学科（法政大学文学部日本文学科編 2024）に入学したことが確認できる。日本文学科 100 周年記念特別展図録に掲載された小山龍之輔と学生たちが写る 1934（昭和 9）年度の国文学研究室卒業アルバム写真（前掲：1 頁）は、石野が国文学科に入学した頃の雰囲気を伝えている。

さらに、1971（昭和46）年8月、雑誌『法政』の「創刊20周年記念特別号」には「特集・沖縄－返還協定以後」が組まれ、その巻頭を飾ったのは石野の「沖縄返還協定の調印を考える―「ひめゆりの塔」から二十六年―」（石野1971）であった。

なお、本稿で紹介する1982年日記の3月29日には、73歳の石野径一郎が母校法政大学についてのメモを記しているので紹介しておきたい。

「「法政大学」についてのメモを一寸。
1880年（明治13）東京法学社として開設。
翌年改称して「東京法学校」と。
ついで「和仏法律学校」
大学令による大学になったのは大正九年。」

2．石野径一郎の小説『ひめゆりの塔』

石野が「ひめゆりの塔」を『令女界』に連載したのは、戦後からわずか4年目にあたる1949（昭和24）年のことであり、翌年の1950（昭和25）年2月には映画化が決まり、9月に単行本が刊行されて、1951（昭和26）年には演劇・舞踊公演も行われている（石野1972）。

このように、石野の小説『ひめゆりの塔』は沖縄戦でのひめゆり学徒隊[3]の悲劇と「ひめゆりの塔」の名前を広く知らしめる先駆けとなったといえる（山田2010：8頁、柳井2019：45頁）。一方で、小説『ひめゆりの塔』の内容は事実と異なるとの指摘が作品発表の直後からあった（石野1950：279-282頁、山田2010：12-13頁、柳井2019：50頁・註36）。また、1950（昭和25）年8月に『鉄の暴風』（沖縄タイムス社1950）、翌1951（昭和26）年7月に『沖縄の悲劇』（仲宗根1951）の体験記・実録が相次いで刊行され、仲宗根政善は「この悲劇が戦後、或は詩歌に詠まれ、或は小説に綴られ、演劇舞踊になって人々の涙をそゝっている」とし、「その事實は次第に誤り傳えられ傳説化しようとしている」（前掲：まえがき）と述べて警鐘を鳴らしたのである。

現在、石野径一郎の小説『ひめゆりの塔』は映画化・歌劇化された作品を含め研究対象となっている（福間2005、吉田2016、柳井2019、山田2020、島2022等）。「女性の殉国美談としての性格が、読者による受容の過程において、実態以上に強調されてしま」い「小説ではなく、記録文学のひとつとして理解されてしまった」（山田2010：10・12頁）との指摘や、「「軍国主義」批判を継承しつつも、女学生の無惨な死と「恋愛」の葛藤を主題化していた。だがそれは仲宗根政善が危惧した「伝説化」の要因ともいえた」（柳井2019：54頁）との指摘がなされており、ほかの石野径一郎作品を研究対象とする動向も示されている（前掲）。

上述した小説の内容が事実と異なることについての石野の意見は、小説『ひめゆりの塔』初版本の「あとがき」の中で「どんなに澤山の記録を擁して書き出したとしても、小説はウソを書かねばならない性質のもの」であり、「それは理想化の姿である」（石野1950：282頁）ことが詳述されている。また、『ひめゆり部隊』の中で石野は生存者に「私の小説について、文学的虚構までも無視して、事実と違うなどと、批難をする人がいるんですが、それを話す資格のあるのは、世界中にあんた一人しかいないんですからね。」（石野1952a：19頁）と話しかける記述がある[4]。

３．石野径一郎の 1945（昭和 20）年－「年譜」

（１）旺文社文庫版「年譜」

旺文社文庫版の小説『ひめゆりの塔』巻末には、石野径一郎による「年譜」（石野 1972）が掲げられている。旺文社文庫版の小説『ひめゆりの塔』は沖縄が日本に返還された 1972（昭和 47）年に刊行されており、「年譜」には生年の 1909（明治 42）年から刊行前年の 1971（昭和 46）年までがまとめられている。

「一九四五（昭和二〇）三六歳。三月九日の大空襲で自宅全焼。妻の実家小松市島町中塚方へ全員疎開。四月十五日、石川県労務報国会主事就任。八月岳父他界。十月単身帰京、伊波先生春潮先生の雑居家族に食客（しょっかく）。」（前掲：240 頁）

（２）講談社文庫版「年譜」

講談社文庫版の小説『ひめゆりの塔』巻末にも、石野径一郎編の「年譜」（石野 1977）が掲げられている。基本的に旺文社文庫版「年譜」と変わらないが、1972（昭和 47）年から 1976（昭和 51）年までを新たに加えている。また、部分的に削除・加筆・修正された箇所がみられ、総じて旺文社文庫版「年譜」の方が詳しい記述となっている。

「昭和二十年　一九四五年　三十六歳
三月九日の大空襲で自宅全焼。妻の実家小松市島町中塚方へ全員疎開。四月十五日、石川県労務報国会主事就任。八月岳父他界。**享年六十三歳。**十月単身帰京、伊波先生、春潮先生の**家族と雑居**。」（前掲：219 頁、旺文社版に加筆・修正された箇所を筆者ゴシック）

（３）石野径一郎の妻子

「年譜」によると、日記に登場する妻は旧姓中塚君子、子供は 1937（昭和 12）年 8 月 5 日生まれの長男赫（あきら）、1944（昭和 19）年 11 月 20 日生まれの長女蕉子である。疎開先の石川県小松市から妻子が東京に戻るのは、1946（昭和 21）年のことであった。

４．1945 年日記と 1982 年日記

（１）日記入手までの経緯

まず、日記の入手経緯を述べておきたい。

沖縄返還 50 年にあたる 2022（令和 4）年頃、複数の石野径一郎日記が都内の古書店で販売されていることを知ったが、そのままとなっていた。戦後 80 年を意識した 2023（令和 5）年の秋頃に再度確認したところ、1945 年日記と 1982 年日記の 2 冊のみが残されていた。1945 年日記には、在本土沖縄県人による沖縄学草創の頃の状況が窺われる記述もあるようで、その資料的価値は計り知れないと判断できたことから、これ以上の散逸を防ぐ必要性を感じた。そして、これを研究資料として入手することとした。年が明けた 2024（令和 6）年 2 月、古書店に連絡して在庫があることを確認し、同年 3 月に日記を実見した上で即日購入した。

なお、店主から日記入手時の状況を確認したところ、20 年ほど前に都内の古書市場（明治古典会）で 20 ～ 30 冊の石野径一郎自筆日記を入手し、最も古い日記は 1945 年日記で、それ以外は 1955（昭和 30）年頃から 1980 年代（昭和 55 ～ 64・平成元年）までのものだったと記憶しているとのことであった。その後、古書即売会（五反田遊古会）などで販売し、資料性の高いと考えられる 1945・1982 年日記を残し、売れ残った 10 冊を束にして市場で販売したが、1945・1982 年日記とも今まで買い手

がつかず現在に至ったとのことであった。

（2）1945 年日記と 1982 年日記

1）1945 年日記

石野 36 歳時の記録である。ハードカバーの横書き罫線ノートを日記帳とし、大きさは縦 20.3cm、横 16.0cm、厚さ 1.5cm を測る。記述は 5 月 29 日から書き始められ、12 月 16 日までペン書きされている。毎日書かれておらず、当時読書していた書物からの抜粋や備忘録的な内容なども記されており、余白頁を多く残している。なお、1 月 1 日の日記が『ひめゆりの国』に再録（石野 1968b：219-220 頁）されているので、5 月 28 日以前の日記帳が別にあったことが分かる。

なお、「帰省メモ」と記された紙片が裏表紙に挟まれていた。内容から 1974（昭和 49）年以降に書かれたものと考えられる。石野は随筆などで日記を用いたり帰省した時のことに触れていることから、この「帰省メモ」も原稿執筆時の資料として書き出したものと思われる。

2）1982 年日記

石野 73 歳時の記録である。青色ハードカバーの旺文社インターナショナル編 1981（昭和 56）年 11 月 20 日発行（非売品）『MY MEMORIES ’82』で、横書き罫線 1 日 1 頁の日記帳となる。大きさは縦 21.3cm、横 15.2cm、厚さ 2.6cm を測る。本扉に「贈呈」の印が押されている。記述されていない頁もあるが、ほぼ毎日ペン書きされており、新聞の切り抜きや写真が貼られた頁もみられる。

3）両日記の取り扱いと翻刻にあたって

本来であれば、2 冊の日記はそのすべてを翻刻し、そこに注釈・解説をつけるべきであるが、本稿ではごく一部の翻刻を示すにとどめている。部分的な翻刻の引用となるため、記述されている月日や全体の分量、記述の前後関係も不明瞭であり、日記の全体像が分からない状態となってしまったが、今後の課題とさせていただきたい。

翻刻にあたっては史料性を優先させることとし、旧仮名遣いや漢字表記は原文のままの表記に努めた。ただし、原文に加えられている削除線や挿入部分は指示通りに修正し、文字下に添付された傍点は文字上につけた。一部の漢字については、振り仮名をつけて読みやすくしている。日記の引用部分には「」をつけた。こうした今回の翻刻は史料性と読みやすさのバランスを考えて行ったが、前に述べたように史料全体を翻刻せずに部分翻刻をしている関係もあり、翻刻方法についても今後の課題としたい。

5．3 月 10 日の東京大空襲と疎開

（1）1982 年日記に記された 3 月 10 日

1945（昭和 20）年から 37 年後にあたる 1983 年日記の 3 月 10 日には、自宅が全焼した東京大空襲の日のことが記されている。この被災によって、石野一家は妻君子の実家へ家族全員が疎開することとなった。

「「文協」に封書（控え）。昼寝て後新聞などよみちらし、夕飯で晩シャクし、又一睡―。怠惰な一日、原稿と親しまず、あゝ、今日は 3 月 10 日、下町大空襲！わが家（荒川区日暮里九丁目 1134 番地）灰燼（かいじん）に帰したる日なり。怠惰も記念の行事と考えよう。

思うに昭和 20 年の今日は週末だった。週末には B29 が帝都をおそうのが、慣例のようになっていた。或る週末に私は土砂と爆風に襲われて半ば生き埋め状態におかれた事もあるのだ。よって「この週末はドロン」と腹をきめて妻子の疎開先石川県小松市島町のきみ子の両親の家へ走ったのだ。すると案の定、留守宅は無人のまま灰になった。さほど金目の物はある筈もないが、夫婦にとっての財産―疎開した僅かの物を引いた八・九割は焼失したわけ。年が経つにつれて家財なる物は忘れたが、春潮先生から頂いた谷崎潤一郎、川端康成の直筆原稿を焼失したのは、惜しまれてならぬ。」

この記述は 1945（昭和 20）年当時の記述ではないため、1945 年日記とまったく同じように扱える資料ではない。こうした限界のある資料であることを理解した上で、1945 年日記を補足する記述として捉えておきたいと思う。

（2）自宅の全焼と疎開

「年譜」にある「三月九日の大空襲で自宅全焼。妻の実家小松市島町中塚方へ全員疎開」との記述からは、東京大空襲による自宅全焼後に小松市の中塚宅へ妻子とともに疎開したとも読み取れる。『ひめゆりの国』にも同様な記述があり（石野 1968b：220 頁）、一方で妻子は前年の 5 月 25 日以前に疎開していたことを示す記述もあったが（前掲：199 頁）、日記には妻子が東京大空襲の自宅全焼前に疎開していたことを傍証する内容が記述されていた。4 月 7 日の日記にも長女出産時（1944[昭和 19] 年 11 月 20 日）には、妻子が小松市に疎開していたことが分かる記述がある [5]。

また、石野は空襲直前の週末に危険を察して小松市の中塚宅へ行っていたところへ予感が的中し、妻子とともに中塚宅にそのまま疎開することとなった経緯については、新事実である。

この小松市での疎開生活は、小説『ひめゆりの塔』にも影響している。登場人物の負傷兵細川三之介がそれで、小説の冒頭から登場し、主人公伊佐川カナにとって特別な存在として繰り返し登場する重要な登場人物の一人となっている。細川三之介は小松で教鞭を執っていた石川県金沢出身の元教師として描かれていることから、註 10 にも述べるように、元教員の石野が疎開先での生活に基づいて設定されたことは確かであろう [6]。

なお、「春潮先生から頂いた谷崎潤一郎、川端康成の直筆原稿を焼失したのは、惜しまれてならぬ」の記述は、「年譜」の 1942（昭和 17）年に沖縄の「郷土史を比嘉春潮、小説を宇野浩二、川端康成、青野季吉、以上四氏に師事す。」（石野 1971b：239 頁）との記述と整合し、注目しておきたい。

6．沖縄玉砕の放送（6 月 26 日）前後

（1）「ひとまとめ」の記述月日とラジオ放送

1945 年日記の 6 月 18 日と 8 月 8 日の記述間には、「ひとまとめ」の見出しをつけた記述がある。「ひとまとめ」には 6 月 26 日のラジオ放送について記されていることから、この記述が一息に書かれたものであるとすれば、6 月 26 日以降の記述と推定することができる。また、記述内容と 8 月初旬の日記内容 [7] を考え合わせると、「ひとまとめ」が記述された時期の下限は 7 月中となる可能性が高い。

6 月 26 日のラジオ放送とは、沖縄の玉砕を

報じたものであった。当時の石野にとって、この日が沖縄戦が終わった日だったと考えられることについては、（3）で説明したい。

『ひめゆりの国』の「沖縄戦の前後」には、1945年日記「ひとまとめ」の内容が記されている（石野1968b：223-226頁）。両者を読み合わせることによって、より当時の石野を知ることができる。

なお、「ひとまとめ」は6月19日から8月7日までの出来事が段落をつけずにまとめられた長い記述となっている。本来であれば、そのままの形で掲載すべきであるが、（2）では記述内容から3つに分けて掲げることとした。

（2）6月19日～8月7日「ひとまとめ」

1）恩人倉橋弥一の死

「ひとまとめ

北海道から帰つて来たら三四通のたよりが待つてゐた。そのたよりの中に倉橋弥一[8]変死の報があつた。生徒からのたよりで、二通を通読すると大体のやうすは分つた。私はひどく動揺を感じた。君子も中村も、家中の者が殆んど笑ひ話として語る死といふのも無いものだと思ひながら、私は寂しかつた。自分はやはり倉橋が好きだったのだと、しみじみ考へさせられた。この時代尓電車事故なぞで斃れる奴も無いものだと思ひ乍らしかし彼らしいユーモアたつぷりな死に方をしたものだと、感心もさせられた。私は恩人を喪つて了つた。倉橋の事については又書く事もあらう。」

2）息子赫との羽咋への小旅行

「数日経つて、私は赫をつれて羽咋へ遊びに行つた。浜へ出て赫を自由にとび廻らせ、自分は朝風に吹かれて読書をしたり、海を眺めたりした。書物は露伴の「幻談」で、環境にふさはしかつた。しづかで、自由で、たのしかつた。昼食をすませて篠田氏をたづねた。老父婦は心から歓迎してくれた。だが、可なり誤算があつた。柳亭といふ料理屋や、その他いろいろの事が、結果からみるとみんなウソであつた。一つ蚊帳の中に唸るやうな蚊の声を聞きつつ全員で寐たが、夜中に空襲があつたりして、寐苦しさ、云はん方なし。しかし、赫との旅とては滅多にない事で、赫はとにかく嬉しかつたであらう。せめてもの慰めである。後で分つた事だが、ゲーテがその一子アウグストを教育するのに旅を以てし、手紙を書き子供にも書かせて躾けて行つた話は、可なりに私を喜こばせた。広く自然や人生を見せる意味から、私も大いに同感なのである。」

3）父の思い出と6月26日、家族との別れ

「しかし、この度の羽咋の小旅行には、もう一つ理由があつた。私が赫くらゐの年齢の時、父は私をつれて船に乗せ、旅館に泊めて、約四五日の名護旅行に出てくれた。その当時の思ひ出は、父についての一番楽しかつた思ひ出で、印象は今もつてはつきり残つてゐる。沖縄の危機が傳へられる今日、父を偲ぶよすがに、我が子をつれて旅に出たのである。しかし、時局柄、乗り物も旅舘も不自由だし、こんな風に他人の好意にあまへかかつたわけである（汽車の切符さへも他人の好意がないと手に入れ得なんだ）。それがうまく行かなかつたとしても、誰をうらむ事があらう。殊に諦めるには充分狎れてゐる今日だ。沖縄と云へば二十六日のラジオでたうとう玉碎の発表が出た。私は諸々の感想を胸に抱きつつ、誰にも語らず、語れず、書けない状

態にあつた。君子に相談して赫（あきら）と蕉子をひきつれて那谷（なた）観音にお参りし、父をはじめ沖縄の家に残つてゐる全家族五人の供養をした。中年の僧はあまり情的な人ではなかつたけれども淡々とした中に上品な所があり、聞き分けもよさそうに見えて、感じのよい読経をしてくれた。もう二ヶ年になるだらうか、父の姿が偲ばれて、私は昼食を取つた木蔭のあたりを離（はな）れ得なんだ。併（しか）し、父の死面（しめん）はどうしても想像がつかぬ。

以上」

（3）石野にとっての沖縄戦が終わった日

6 月 26 日の沖縄玉砕を伝えるラジオ放送を聞いた石野は、「**たうとう**玉砕（ぎょくさい）の発表が出た」（筆者ゴシック）と記しているように、出身地の沖縄が戦場となっていることを憂えていたことが分かる。

ここで注目しておきたい文献として、石野が疎開する前から世話になり、戦後の一時期に寄宿もさせてもらっていた在京の比嘉春潮による回想録を掲げておきたい。比嘉は「沖縄の惨状を嘆く」の小見出しをつけ、当時の状況を回想している（比嘉 1997：195-197 頁）。

「私のところには現在も昭和十九年十月から上陸寸前の二月末日までの「沖縄新報」がある。刻々と身に迫る危険が感じられる緊迫した紙面である。そして一ばん最後の新聞は慶良間上陸の報が入ってから私の手元にとどき、胸を締めつけられるような思いで受け取ったものだ。**郷里の危急に寄せる思いは誰も同じであった。**」（前掲：196 頁、筆者ゴシック）

「戦争も敗色濃くなった昭和二十年の春から夏へかけては、**私たち東京に住む者には、郷土の戦禍も気にかかり、切ない思いをしながら**も、またいつわが身にふりかかってくるかもしれぬ爆撃への心配があり、一方刻々と悪くなる食糧事情に、心の安まるいとまとてなかった。」（前掲：198 頁、筆者ゴシック）

当時、柳田国男のもとで研究活動をしていた比嘉は柳田国男の日記にも登場しており、柳田の日記に「「比嘉春潮君来、沖縄のあはれな話をする」（十九年十二月二十五日）、「伊波君、島袋君を伴い来る。沖縄の惨状をかたる」（二十年四月四日）、「比嘉君来、沖縄の話をする」（同年四月八日）とあるように、**そのころの沖縄人は人の顔さえ見れば、故郷の戦禍を語らねば胸がおさまらないのであった。**」（前掲：196 頁、筆者ゴシック）

これらは沖縄を憂い、沖縄の惨状を嘆く石野日記とも共通する記述であり、在本土沖縄県人の気持ちを伝える記録と考えることができる。

そして、沖縄玉砕を知った石野は「諸々の感想を胸に抱きつつ、誰にも語らず、語れず、書けない状態」となり、「那谷（なた）観音にお参りし、父をはじめ沖縄の家に残つてゐる、全家族五人の供養をした」のである。7（2）2）で述べる岳父の骨拾いの記述からも窺われるように、在本土沖縄県人であった石野の肉親の死に対する思いと考えは、沖縄の葬墓制にみられるような古風な感情（伊波 1927）が強く影響していたのではなかろうか。

こうしたことから、石野にとっての沖縄戦が終わった日は、沖縄の家族が亡くなったことを知った 6 月 26 日と捉えることができる。

（4）沖縄の家族

1）生き残った家族との再会

石野が供養した「沖縄の家に残っている全家

族五人」とは、「年譜」などから父、母、妹、双子の弟であったようである（石野 1956a：257 頁・1972：236 頁）[9]。死別したはずの家族は生きており、1951（昭和 26）年 6 月に石野が戦後初めて沖縄へ帰省した際、家族と再会している。

この時の再会の様子が『沖縄の民』の「あとがき」（石野 1956a）と『ひめゆりの国』（石野 1968b）の中に記されている。ここでは『沖縄の民』「あとがき」の記述を掲げておきたい。

「昭和二十六年の六月から二カ月間にわたって、私は、戦後、はじめて帰省した。（中略）爆風で耳をやられた老父をはじめ、母や、弟妹や、友人、親戚、恩師などの、健在な姿を見ては、手を取りあって「よかった」「よかった」と、沖縄戦に生残（ママ）ったことを喜びあったが、それは、恐らく一生忘れることの出来ない印象を残した。」（石野 1956a：257 頁）

２）那谷（なた）観音

日記に登場する那谷（なた）観音とは、石川県小松市内に所在する千手観音菩薩像を本尊とした高野山真言宗別格本山の那谷寺（なたでら）のことである。『ひめゆりの国』には「那谷寺（なたでら）は『奥の細道』を愛読していた頃からのなじみで、結婚前から親近感を持ちつづけた寺である。妻の実家からはほぼ一里の距離にあり、温泉電車が通っているので、何度たずねたか分からない。芭蕉の句が有名である。（中略）昭和十七年に沖縄から父を迎えた時も、妻の両親との交歓をかねて北陸見物からはじめたので、父と付添いの次男をそこに案内した。加賀百万石の城下町は今の言葉でいう平和主義的気風にあふれ、甚だしく「守礼の国」の首里に似たところがある[10]。そこで那谷（なた）観音の護符（おまもり）を受けて渡すと、父は喜んでおし頂いた。」（石野 1968b：224-225 頁）との思い出が語られ、沖縄に残してきた家族の供養のために那谷寺（なたでら）を選ばれた理由が明らかにされている。続けて那谷（なた）観音の護符から 18 年後、供養から 15 年後にあたる 1960（昭和 35）年に父が上京した際の後日談が以下のように語られている。

「それから暫くして父はふところから古い財布を出し、何かを大切にそうに取り出し「那谷（なた）のこれだよ」といった。それは当時妻の母のドンスのはぎれで作った小さい袋にはいったままである。（中略）「護符（おまもり）のお陰でわが家は一人残らず助かった。戦前から残っているのは、この護符と皆の命だけです。あれから今日まで肌身離さずですから誰も知りません。今日きみ子さんに見せたのが初めてですよ。」と妻にいった。私たちは感動し、こもごも那谷（なた）寺（でら）の葬式について話した。父は笑って「有難う。礼をいいます」といい、何を考えたか「来年の五月にはきっと来ますからね」と妻と確約した。ところが、三六年の五月五日になると、父はさっさと天国に旅立ってしまった。享年八十一歳[11]である。」（前掲）

３）『琉歌つれづれ』にみる石野の父と母

「ひとまとめ」には、沖縄に残してきた父を通して沖縄を憂えていた石野の姿があった。1973（昭和 48）年刊行の『琉歌つれづれ』をみると、そこには実母との思い出も含まれていたようにも思われることから、『琉歌つれづれ』に石野が語った父と母を紹介しておきたい。

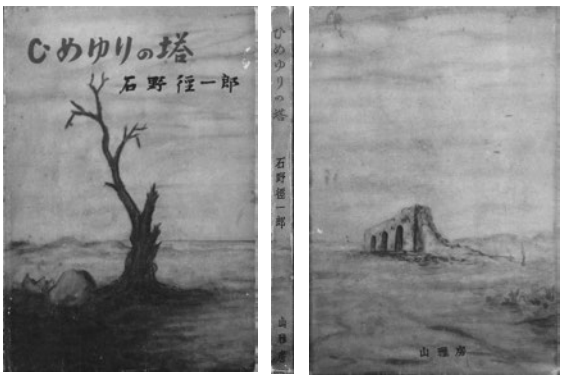
父については「私の父八十翁は、後添いの妻（即ち私の継母）に先立たれ、しばらくは寂し

そうだったが、いずれ後生に行けば、前後二人の女房にかしずかれて左団扇（ひだりうちわ）で暮らせるのだから、死ぬのなんか気にならぬといって朗らかだった。」（石野 1973a：124 頁）とある。旺文社文庫版「年譜」によれば、石野の父の再婚は、1919（大正 8）年のことである。

実母については「私は首里から泊の小学校三年に転校し、その三学期に当時三十一歳の母と死別した。母は胃腸病で入院し、一度よくなって退院し、再入院して間もなく退院、この世を去った。母が病床についてから、私は母に優しい言葉の一つもかけず、反対に悪態ばかりついたと思う。友の母たちが元気で子の面倒見がよかったのに比べ、寝たきりの母を持つ私は、ひどく孤独だった。それを知ってか、母は或る時起き出し、人力車で私を芝居につれていった。それは渡嘉敷フィーファーのあだ名を持つ名優の出演する継母ビエレ（付き合い）の悲劇だった。翌日も母は今「上地の叔母」と呼ぶ父の妹を古島から呼び寄せて二度私に見せるという念の入れかただった。大正七年の秋頃だろうか。私は今も、母は何が故に同じ劇を二度も―と、時々考える。」（石野 1973b：180 頁）と思い出が綴られている。「年譜」には母の他界は 1918（大正 7）年 2 月となっているので、1917（大正 6）年秋の思い出であろうか。

4）石野の泊尋常小学校時代への思い

『琉歌つれづれ』には、ほかにも 1 年を過ごしたに過ぎない泊尋常小学校時代の思い出が記されており（石野 1973c・d）、母の思い出とともに石野の思い入れが感じられる。それは、小説『ひめゆりの塔』最初の単行本となる山雅房版（石野 1950）の表紙にも表れているように考えられる。



表紙　　背表紙　　裏表紙

図 1　山雅房版の小説『ひめゆりの塔』表紙（石野 1950）

我部政雄装幀の表紙には、沖縄戦で荒廃した 1 枚の風景画が用いられている。風景画はカラー印刷で、表紙・背表紙、裏表紙に三分割されている（図 1）。裏表紙には泊方面を望むように崇元寺石門が斜めに描かれ、泊尋常小学校時代の思い出が綴られた「泊前道」からの構図となっている[12]。崇元寺石門を通り越した先の右手は泊尋常小学校が位置する場所で、校舎の背後にあたると思われる黄金森と高真佐理の丘が連なる丘陵の稜線が遠くに描かれている（図 1 裏表紙の右端）。比較資料として沖縄戦直後頃に撮影された新出資料 1 枚（写真 3[13]）を含む 4 枚 4 段階の写真組列[14]を掲げ、少年石野径一郎が通っていた泊尋常小学校の変遷を示しておきたい（写真 1 ～ 4[15]）。

7．疎開先での岳父逝去と葬儀直後の玉音放送

（1）石野径一郎の 8 月

石野は『ひめゆりの国』の中で、当日の記述として「終戦の日はきた。よく晴れた暑い日だった。」（石野 1968b：226 頁）とだけ記している。「年譜」には「八月岳父他界。」（石野 1972：

写真１　1930（昭和５）年以前撮影
（那覇市歴史博物館提供）

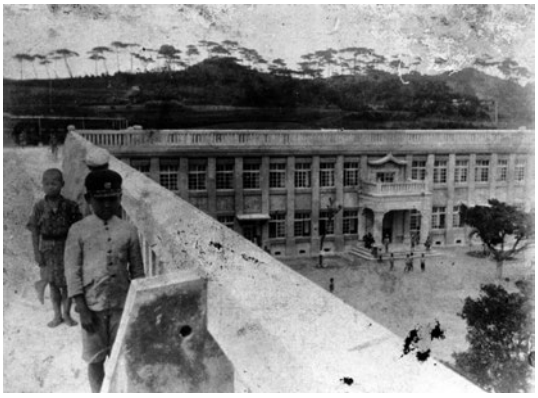


写真２　1930（昭和５）年以降撮影
（那覇市歴史博物館提供）

写真３　1945（昭和 20）年沖縄戦直後頃撮影
（筆者所蔵）

写真４　1950（昭和 25）年頃撮影
（那覇市歴史博物館提供）

写真１～４　泊尋常小学校・泊国民学校と松林の変遷および沖縄戦をくぐり抜けた校舎と背後の黄金森（くがにむい）

写真１：1930（昭和５）年以前撮影の木造校舎。石野径一郎が通っていた頃の校舎も木造だった。背後の丘陵の稜線と小高い黄金森（くがにむい）、松林が美しく、少年石野径一郎も見慣れた風景だったことが偲ばれる。

写真２：1930（昭和５）年以降撮影の鉄筋コンクリート校舎。この校舎は、石野が上京した 1926（大正 15・昭和元）年の４年後にあたる法政大学入学の翌年、1930（昭和５）年に竣工した。背後の丘陵の稜線、黄金森（くがにむい）、松林の風景は変わらず美しい。1941（昭和 16）年の国民学校令によって、泊尋常小学校から泊国民学校に改称される。

写真３：1945（昭和 20）年沖縄戦直後頃に撮影されたと考えられる鉄筋コンクリート校舎。背後の松林は右端にみえる黄金森（くがにむい）の手前に４～５本、左端にわずかにみえる小高い高真佐理（たかまさい）に５～６本ほどを残すのみとなった。山雅房版小説『ひめゆりの塔』の表紙風景画に相当する時期の写真である。

写真４：1950（昭和 25）年頃撮影とされる鉄筋コンクリート校舎。米軍施設として使われている。右端の黄（く）金森（がにむい）の手前に残っていた松は失われる。石野が戦後初めて帰省した 1951（昭和 26）年に近い頃の撮影写真である。

その後：1979（昭和 54）年に鉄筋コンクリート校舎は解体され、正面玄関の２階踊り場にあたる「時計台」とよばれる部分が、現在の那覇市泊小学校敷地内に保存されている。

240 頁）とあった。一方の 1945 年日記には、註 7 で述べたように石野が 8 月初旬に上京した記述があり、その後、「年譜」にあるように岳父が他界し、慌ただしく葬儀を終えたところで 8 月 15 日を迎えたことが記されていた。

こうした石野が置かれていた状況の経緯から、以下に 8 月 10 日から 15 日までの記述を掲げることとした。なお、10 日の記述頁上端にある余白と 15 日の記述後には、モンテーニュの『随想録』からの抜粋が記されているが、本稿では省略した。

（2）岳父の逝去から葬儀直後の様子

1）8 月 10 日－岳父の死、通夜－

重病だった岳父が逝去し、その日の夜に通夜が行われることとなった。同じ村で葬式が重なることとも関係し、慌ただしく葬儀の準備が始まった。

「8．10.

朝本廳へ行き岳父の病気が重い事を高橋氏尓告げて山へ引上げて来ると松本がやつて来た。高浜製塩にからんで、北川氏のだらし無さを語るに及び、話が沸騰した。昼食をすませ道々歩き乍ら話して別れる。暑さがきびしい。ふだんより早く汽車尓乗り粟津駅尓着くと遺骨を迎へるとかで義母が駅へ来てゐる。ちよつと合図をして別れる。脚のおできが痛く、家までの道を不断の倍ほどもかかつて歩く。そして漸つと着いてみると、君子とフミ子が顔色を変へて飛出して来た。醫者かと思つたと云ふ。「もう駄目なのよ」と、君子は泣き声を出した。着てゐるものを脱き棄てて岳父の枕元にうづくまる。大声を上げて呼ぶが、も早や返事がない。俯伏せになつた顔を見ると、瞳孔が開いて了つてゐる。「ぢいちやん、元気を出しなさい、ぢいちやん！」と私は呼ぶ。君子もフミ子も呼ぶ。赫が元気よく帰つて来て、この有様を見て黙つて棒立ちになるのが見える。福井に早く知らせろと云ふ事になり、私は名刺をふところにして駅前の駐在所へとぶ。電話は上手く通じ、高橋氏にすぐ手配してくれるようにたのむ。帰つて来た。私が出かけてから間も無く息は絶えたと云ふから三時五十分頃の事だらうか。間もなく近親の者が馳せ参じ、手配して八方へれんらくがつけられる。敏雄のところへ、速達やらデンポウやら ‥‥。続々村の衆が集まる。目の廻るような忙しさ。殆んど準備がととのひ、この夜が通夜ときまる。」

2）8 月 11・12 日－岳父の葬式、火葬－

村で葬式が重なり、岳父の葬式は先に行われた。葬式後に火葬に付されたようで、翌日に骨拾いが行われる。薪によって一晩かけて火葬されたと思われるが、充分に骨化していない部分が残されていた。身内の女性によって死者に対する深い情をもって骨が処理される記述は、石野の出身地沖縄で行われていた洗骨葬（伊波 1927）と重ねられた描写と考えられ、注意しておきたい。

「8．11.

親戚の家に遺骨が帰つて来て、個人葬が行はれるとあり、村で二つの葬式がかち合ふ。僧侶の関係や何かで、五時になつたり、三時になつたりするが、決極三時にきまり、一ト足先となる。式がすみ、私は柩をひいて三昧にいたる。岳父の実姉、この夜到着。

8．12.

骨拾ひ。この日赫(あきら)は微熱がある。祖父の遺骸が火の中に入るのを見て、神経熱を起したのだと云ふ。墓の掃除などをした後で、竈を開く。頭の部分が充分には燃えてゐない。君子、フミ子、義母、よく活躍する。少々事務的に動くようでゐて、しかも故人に対する親愛の情は深く、骨を裂き、骨を集め、骨を拾ひ乍ら、尊敬すべき愛情の程を見せる。顔や声に泪をたたへつつ遺骸を気味悪がつてゐるのと対蹠(たいせき)的な情景である。この午後、京都の中島等来る。」

3）8月13・14日－葬儀後の残務と来訪者－

岳父の逝去から慌ただしく続いた一連の葬儀が終わった後も事務処理があり、来訪者、滞在者も多く騒がしい中、石野は金沢へ行き、15日に富山県の高岡へ出かけるための切符を購入した。その後、帰宅しても騒々しい状況は変わっておらず、悄愴(しょうそう)とする。

「8．13.

家の中騒々しく、葬式後の事務は夛(おお)く、ぼつぼつゐたたまらなくなつて来る。くやみを云つて来たついでに食ひ溜めをして行くような者もゐる。暑さは暑し避難場は無く、日中はお宮の杜に来て本を読んでゐる。午後福井の高橋をば帰る。

8．14.

この休みを利用して高岡へ行かなければ、もう所詮行く機も無いであらうと、元気を出して金沢へ。そして一時間半ほど行列して、切符を買ふ。一時七分の汽車で帰る。中島一家族がぎやあぎやあ騒ぐのへ来訪者が夛(おお)く、悄愴(しょうそう)して何物も手につかぬ。儀母(ママ)やフミ子に中島一家族を優遇して我等へつらあてする感情ちらつく。不快なり。」

（3）玉音放送

1）8月15日－金沢駅で聞いた玉音放送－

石野は早朝より小松での葬儀後の悄愴(しょうそう)と不快から抜け出して高岡へ行き、高岡での用事の内容は不明であるが、早くも午前11時には高岡を出発している。そして、石野は乗り換えのため汽車を待っていた金沢駅構内で玉音放送を聞いたのである。

高岡では空襲警報が発令されたと記されているが、これは「八月十四日の夜から八月十五日の未明にかけ行われた」「日本への最後の空襲」(河邑編 1995:25頁)である。石野の記述は「秋田・小田原市・高崎市・熊谷市・伊勢崎市の五都市が爆撃され、」「空襲のあった関東・東北の人々の八月十五日の日記には、B29の恐怖の夜と、玉音放送の真夏の正午が強烈な対象で描かれている」（前掲：26頁）ことに、連鎖する記録でもある。

「8．15.

朝一番で高岡へ。空いてゐて気持がいゝ。車中 「惜しみ無く愛は奪ふ」を読む。高岡の街は猛烈に暑い。地図に従(したが)ひ、人に聞き、どんどん行つて、殆(ほと)んど話もしないで荷物を運んで駅まで帰る。と、警戒警報が出た。汽車は三時間おくれる、と云ふ。さうすると当方には却つて都合がよく、午后三時でないと乗れない筈の汽車を午前十一時に乗つた。金沢で下りて、次の汽車を待つてゐる間に、ラジオで「君が代」の曲を聞く。はて、今日は祭日か、何か、國家的

の行事でもあつたかと、いぶかる。―ところが、豈図（あにはか）らんや、この時こそ、重大発表があり、陛下御自らの放送があつたのである。警戒警報も変なものだつた由。大いなる悲しみの日、また何をか書かんや。何をか云はんや。」

２）石野の８月 15 日

石野にとって 8 月 15 日が 6 月 26 日とともに重要な日であることは、石野と同じ在本土沖縄県人であった比嘉春潮の回想録にも示されている。比嘉は「涙できく終戦詔勅」の小見出しをつけ、当時の状況を回想している（比嘉 1997：198-200 頁）。

5 月 29 日に空襲で焼き出された伊波普猷を自宅に招いて同居が始まって「二月半たって、あの歴史的な八月十五日を迎えた。（中略）当時丹念につけていた日記には次のように書いてある。「正午臨時の放送の後天皇陛下の詔勅のご放送。録音らしく音声低く弱い。果たして四国宣言の全的な受諾なり。お気の毒というほかなし。続いて政府の声明、伊波先生と三人（一人は冬子夫人であろう）声を呑んできく。今日で戦争は終わった。」」（前掲：199 頁）

「実感がわかないまま、思いは沖縄の知友の上に飛び、「・・・・・・また沖縄にいる人びと－春汀（甥）、屋部憲、仲吉、屋嘉たち－今生きているか、死んでいるか－とも逢えるようになるのに、なんだか現実をはなれたことのように思えて仕方がない」と書いてある。」（前掲：199-200 頁）

沖縄戦および沖縄玉砕の放送があった 6 月 26 日と同じく、8 月 15 日の玉音放送の場合も沖縄を憂えた記述であり、在本土沖縄県人の気持ちを伝える記録といえる。石野も同じ気持ちだったことが窺われるが、この時点の石野は沖縄の家族を失っていたのである。

また、1926（大正 15）年に上京してから約 20 年近く在京・在本土沖縄県人として生活していた石野の本名は「高江洲朝和」だったが、戦後すぐに石野姓に改姓したという（綱川 2024：1 頁）。「石野径一郎」は戦前から使っていたペンネームであった。石野姓への改姓は、「明治末期から大正時代にかけて、（中略）沖縄独特の姓名を本土風に改める風潮」とされる「改姓改名運動」（琉球新報社編 1998：107 頁、納富 2007、並松 2013）の影響があったかは検討しなければならないが、戦後も在京・在本土沖縄県人として生活してゆくことの決意の表れとも考えられる。法政大学沖縄文化研究所所蔵の石野径一郎資料からは「本土では知られることの少ない沖縄の現実を、作品を通して多くの読者に知らせたいという強い思いが感じられる」（綱川 2024：5 頁）との指摘もあり、注意しておきたい[16]。

こうしたことから、石野にとっての 8 月 15 日は、6 月 26 日と同様に小説『ひめゆりの塔』の原点となる日として捉えることができる。

まとめ

以上、石野径一郎日記の中から 1945（昭和 20）年 3 月 10 日、6 月 26 日、8 月 15 日を紹介した。いずれも短い記述であり、3 月 10 日については戦後 37 年が経過した 1982 年に記されたものであり、1982 年日記の取り扱いや翻刻方法に課題を残した。しかし、1945・1982 年日記は沖縄から離れて戦争の時代を生きた石野径一郎の記録として、「年譜」やほかの著作と合わせ読むことによって、当時の様子

や状況を知ることができた。こうしたことから、石野径一郎日記は小説『ひめゆりの塔』をはじめとする戦後の石野沖縄文学作品の原点として捉えられ、また、「年譜」や日記を引用・再録した随筆など石野作品の内容を補足・検討することができる資料となることも示すことができたと思う。

3月10日の東京大空襲は、石野家の自宅が全焼したことで、家族全員の疎開生活を長期化させることとなった。小説『ひめゆりの塔』の登場人物細川三之介にみられるように、小松市での疎開生活はこの作品に反映されたのである。

6月26日は、当時の石野が沖縄の家族を失ったことを知った日であり、この日が石野にとっての沖縄戦が終わった日と考えられた。6月26日前後のことが記述された「ひとまとめ」は、『ひめゆりの国』とともに石野が沖縄を憂えていたことを伝える記録でもあり、その背景には沖縄の父母の姿があったと考えられた。それだけに、沖縄戦をくぐり抜けた家族と再会した時に喜び合ったことが、石野に「恐らく一生忘れることの出来ない印象を残した」（石野1956a：257頁）といわしめたのであろう。石野が那谷（なた）観音護符の後日談を父から聞いたのはその後のことであったが（石野1968b：224-225頁）、父もまた石野と同じ気持ちをもち続けていたのである。

玉音放送があった8月15日は、「大いなる悲しみの日、また何をか書かんや。何をか言はんや。」と石野は書き遺した。在本土沖縄県人の石野径一郎にとっては6月26日にラジオで聞いた沖縄玉砕の発表とともに大きな衝撃だったことは間違いない。

石野にとっての6月26日と8月15日は大きな画期となった日であり、それは比嘉春潮の回顧にもあったように、在本土沖縄県人にとって8月15日も沖縄を憂えた日となることが確認できた。このことは、最も大きな成果であったといえるのではないかと考えられる。

また、本稿では小説『ひめゆりの塔』が最初に単行本化された山雅房版の表紙風景画に、石野径一郎の思い入れが反映されている可能性を指摘した。今後は石野作品に用いられた挿絵なども検討対象となることが考えられるが（綱川2024）、その場合には写真組列を用いた写真考古学的な視点・検討（中山2024b）も効果的であることが示せたかと思う。

筆者は沖縄の葬墓制に興味をもって以来、粟国島調査を少しずつ継続してきた（中山2001、2024a）。以前は沖縄滞在中に必ずといってよいほど、沖縄戦を経験された方々から体験談を聞くことがあった。しかし、最近では世代交代が進み、そうした機会はほぼなくなってしまった。今後は石野径一郎日記を埋もれさせることなく、石野径一郎日記を通した沖縄研究も視野に入れてゆきたいと考えはじめているところである。7（1）や註7で述べたように、本稿では紹介できなかった1945年8月初旬に上京した際の記述があり、それは在京の沖縄学史資料としての側面もあると考えられるため、改めて報告する機会をもちたい。

謝辞　石野径一郎日記入手に際して、月輪書林の高橋徹氏にお世話になりました。日記の翻刻および写真資料の被写体比定にあたっては中山有樹子氏より、法政大学沖縄文化研究所所蔵の石野径一郎文庫については同研究所の綱川恵美氏よりご教示をいただき、写真調整には太田雅晃

氏、英文要約には鹿島義之氏、鑑田夏実氏からご協力をいただきました。また、査読者の方々には的確なアドバイスをいただきました。心より感謝申し上げます。

註

1　入手経緯については、4（1）で述べる。

2　法政大学沖縄文化研究所には 1991（平成 3）年に石野径一郎のご遺族から寄贈された「石野径一郎文庫」が所蔵されている（仲程 1992、綱川 2024）。現在、これらの石野資料が再整理されているとのことである。

3　「「ひめゆり学徒隊」などの女子学徒隊の呼称は戦後の通称である」（「沖縄戦の全学徒たち」展報告書編集委員会 2000：凡例 7）と説明されおり、本稿でも「ひめゆり学徒隊」名称を用いることとする。

4　『ひめゆり部隊』で紹介された「米須の『ひめゆりの塔』下にある壕」の生存者（大城好子さん）が語られた体験（石野 1952 a）は、後に『ひめゆりの国』の中で詳述され（石野 1968 a）、雑誌『法政』にも『ひめゆりの国』の記述が紹介されている（石野 1971）。しかし、『ひめゆりの国』の記述には、『ひめゆり部隊』で石野が大城さんに対して話した引用部分の会話は省略されている（石野 1968a：175 頁）。

5　1983 年日記の 4 月 7 日（水）には、新聞切り抜き「地名を歩く 道灌山 景勝の台地」（新聞名不明）が貼られ、「これは我ら夫婦がはじめて一軒の家に世帯を持った土地。荒川区日暮里九丁目一, 一二四番地島崎氏（著名な日本画家）の新築貸家で、日暮里駅まで五分の七面坂下。ここで長男の赫（あきら）が昭和十二年に生まれ**長女の出産は十九年の疎開先で、父はこの家で電報を受け取る。**やがて家は三月十日（二十年）の空襲で焼失し、下谷竹町の知人の宅に間借りすることになり、その竹町十二の十一番地から赫（あきら）は、この地図に見える開成中・高校へ通学する。」と記述されている（筆者ゴシック）。

6　1982 年日記 5 月 19 日に「長男の赫（あきら）は疎開先石川県小松市島町の符津（ふつ）国民学校の一年生だった。」と記されており、細川三之介の経歴と重なる。

7　8 月初旬に上京した際の記述があり、この中に比嘉春潮宅でのことが記されている。

8　倉橋弥一は詩人で、旺文社文庫版「年譜」（石野 1972）には 1943（昭和 18）年に石野が兄事した一人として記されている。「ひとまとめ」に「自分はやはり倉橋が好きだったのだ」と記されている通り、石野は『ひめゆりの国』（石野 1968 b）や 1982 年日記の中にも倉橋弥一との思い出を綴っている。

9　沖縄の家族構成だけではなく、ほかにも日記と「年譜」、『ひめゆりの国』などや作品間の記述にも齟齬が認められるので、各記述の内容を比較しながら紐解く必要がある。

10　旺文社文庫版の小説『ひめゆりの塔』の 21 頁に、負傷兵細川三之介が「石川県金沢市です。勤め先は小松（こまつ）の在（ざい）で、温泉のあるところですよ。そういえば、お国とは反対で、昔から兵火の経験の少ない国です。加賀百万石（ごく）の初代前田利家（まえだとしいえ）が、極端に戦争を避けてきた人だったんです。その伝統といえるかどうか知らんが、戦争を回避（かいひ）したりサボったりして明治の新政府まできたらしいんです。やりぬけたというのは、地理的に幸運でもあったんですね。そこへいくと、お国は不運でしたね。守礼（しゅれい）の国（非武装の文化国家）という名前で、戦争を避けることだけに努（つと）めてきながら、こうして世界にもおそらく例のない戦禍（せんか）をうけるなんて、ひどい話しですね。」と伊差川カナに話す場面がある。

11　旺文社文庫版、講談社文庫版とも「年譜」では享年 80 歳となっている。

12　『琉歌つれづれ』の泊尋常小学校時代の思い出を綴った中で、「那覇の崇元寺（そうげんじ）石門（復元）」のタイトルがつけられた佐々木一郎による挿絵が掲載されている（石野 1973 d：195 頁）。

13　写真 3 は筆者所蔵の購入資料である。写真の旧蔵者は米軍関係者とのことで、裏面に鉛筆書きで「Naha College Okinawa」と記されている。

14　写真組列とは、被写体比較によって撮影順に写真を配列し相対年代化したもので、これに実年代を比定することによって写真をより明確な年代的な基準資料とすることができる写真考古学特有の編年方法である（中山 2024 b）。

15　写真１～４・その後の解説は、引用・参考文献に掲げた真喜屋力「【FILMS】泊小学校校舎増改築工事・解体」『沖縄アーカイブ研究所』、ＮＨＫ「那覇市泊小学校【戦跡を歩く】(2008 年 10 月 22 日放送)」『ＮＨＫアーカイブス』、那覇市歴史博物館「泊尋常小学校職員と生徒」『デジタルミュージアム』を参考にした。

16　綱川 2024 に掲げられている文献に「ヤマトに生きる　大作に挑む石野氏」沖縄タイムス、1961 年 11 月 20 日がある（筆者未見）。

引用・参考文献

石野径一郎『ひめゆりの塔』山雅房、1950 年、6 頁

石野径一郎「ひめゆり部隊（真相『ひめゆりの塔』)」『ひめゆり部隊』出版東京、1952 年 a、8 月、6-32 頁

石野径一郎「嘆きの島」『ひめゆり部隊』 出版東京、1952 年 b、8 月、64-78 頁

石野径一郎「あとがき」『沖縄の民』鱒書房、1956 年 a、7 月、257-258 頁

石野径一郎「著者略歴」『沖縄の民』鱒書房、1956 年 b、7 月、257-258 頁

石野径一郎「「実説」ひめゆりの塔」『ひめゆりの国』朝日書院、1968 年 a、12 月、173-191 頁

石野径一郎「沖縄戦の前後」『ひめゆりの国』朝書院、1968 年 b、12 月、192-234 頁

石野径一郎「沖縄返還協定を考える－「ひめゆりの塔」から二十六年－」『法政』20 巻 7・8 号（№229)、法政大学、1971 年、8 月、3-6 頁

石野径一郎「年譜」『旺文社文庫　ひめゆりの塔』旺文社、1972 年、1 月、236-244 頁

石野径一郎「死」『琉歌つれづれ』東邦書房、1973 年 a、3 月、124-125 頁

石野径一郎「母を恋うる記」『琉歌つれづれ』東邦書房、1973 年 b、3 月、180-181 頁

石野径一郎「泊前道 1」『琉歌つれづれ』東邦書房、1973 年 c、3 月、192-193 頁

石野径一郎「泊前道 2」『琉歌つれづれ』東邦書房、1973 年 d、3 月、194-195 頁

石野径一郎「年譜」『講談社文庫　ひめゆりの塔』講談社、1977 年、6 月、215-225 頁

伊波普猷「南島古代の葬儀」『民族』第 2 巻第 6 号、民族発行所、1927 年、6 月、9-38 頁

永六輔監修『八月十五日の日記』講談社、1995 年、6 月

NHK「那覇市泊小学校【戦跡を歩く】(2008 年 10 月 22 日放送)」『NHK アーカイブス』https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0001860023_00000（参照 2024-9-24）

「沖縄戦の全学徒たち」展報告書編集委員会『ひめゆり平和記念資料館開館 10 周年記念イベント「沖縄戦の全学徒たち」展報告書』財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会立ひめゆり平和記念資料館、2000 年、3 月

沖縄タイムス社『鉄の暴風』沖縄タイムス社、1950 年、8 月

河邑厚徳編著『昭和二〇年八月一五日　夏の日記』角川文庫 9677、角川書店、1995 年、5 月（初版は 1985 年博文館新社刊行）

島　大吾「私は生きのこった」：宝塚歌劇団『ひめゆりの塔』に画かれた沖縄戦」『京都産業大学論集人文科学系列』第 55 号、京都産業大学、2022 年、3 月、157-185 頁

綱川恵美「沖縄文化研究所蔵石野径一郎文庫と『守礼の國挿絵』石野径一郎(作）芹沢銈介(装幀）について」『法政大学沖縄文化研究所所報』第 94 号、法政大学沖縄文化研究所、2024 年、8 月、1-5 頁

仲宗根政善『沖縄の悲劇－姫百合の塔をめぐる人々の手記－』華頂書房、1951 年、7 月

仲程昌徳「沖縄近代文学研究への一里塚－石野径一郎文庫の意義」『法政大学沖縄文化研究所所報』第 39 号、法政大学沖縄文化研究所、1992 年、10 月、9-11 頁

中山　豊「フチュクルビン覚書」『民具マンスリー』第 34 巻 2 号、神奈川大学日本常民文化研究所、2001 年、5 月、7-22 頁

中山　豊「粟国島の掘込墓と伝承考古学の提唱－

バンヤー・ウエテラカク墓地の水平層位分析を中心として－」『法政考古学』第 50 集、法政考古学会、2024 年 a、3 月、175-190 頁
中山　豊「1907（明治 40）年にはなかったモースの江の島臨海実験所建物－漁師小屋建物解体期の写真考古学的新発見資料と 6 段階編年－」『モース研究』第 33 号、モース研究会、 2024 年 b、5 月、12-15 頁
並松伸久「比嘉春潮と沖縄研究の展開－インフォーマントとしての役割－」『京都産業大学論集　人文科学系列』第 46 号、京都産業大学、2013 年、3 月、79-112 頁
那覇市歴史博物館「泊尋常小学校職員と生徒」『デジタルミュージアム』http://www.rekishi-archive.city.naha.okinawa.jp/archives/item3/32892（参照 2024.9.24）
那覇市歴史博物館「泊尋常小学校校舎と生徒」『デジタルミュージアム』http://www.rekishi-archive.city.naha.okinawa.jp/archives/item3/32902（参照 2024.9.24）
那覇市歴史博物館「元泊国民学校（南側より撮影）」『デジタルミュージアム』http://www.rekishi-archive.city.naha.okinawa.jp/archives/item3/74582（参照 2024.9.24）
納冨香織「比嘉春潮論への覚書－ 1930 ～ 1940 年代の在本土沖縄県人との関係を中心に－（付 比嘉春潮著作目録）」『史料編集室紀要』第 32 号、沖縄県教育委員会、2007 年、3 月、21-50 頁
比嘉春潮『比嘉春潮「沖縄の歳月 自伝的回想から」』日本図書センター、1997 年、12 月（底本は『沖縄の歳月 自伝的回想から』中央公論社、1969 年、3 月）
福間良明「「反戦」の語りと読みのメディア史－手記から映画へ:「ひめゆりの塔」を事例にして」『マス・コミュニケーション研究』第 67 号、日本マス・コミュニケーション学会、2005 年、8 月、67-83 頁
法政大学文学部日本文学科編『法政大学日本文学科 100 周年記念　HOSEI ミュージアム特別展示 文学部日本文学科の 100 年と『法政文芸』の 20 年』法政大学文学部日本文学科、2024 年、9 月
真喜屋　力「【FILMS】泊小学校校舎増改築工事・解体」『沖縄アーカイブ研究所』2020 年 https://okinawa-archives-labo.com/?p=7486（参照 2024.9.24）
法政大学史委員会・法政大学史センター編『法政大学野球部創部 100 周年記念展示会　法政野球 100 年　解説集』法政大学史委員会・法政大学史センター、2016 年、1 月
HOSEI ミュージアム・コア「学生たちがつくった法政大学校歌（常設展示プレート）」（参照 2024.7.2）
柳井貴士「石野径一郎『ひめゆりの塔』論－その周辺と内容をめぐって」『近代文学研究』第 31 号、日本文学協会近代部会、2019 年、4 月、44-58 頁
山田潤治「〈脱周縁化〉する記憶―「ひめゆりの塔」の表象―」『大正大學研究紀要』第 95 輯、大正大学、2020 年、2 月、1-19 頁
吉田直子「「生き延びてきた」戦争の記憶を継承する－「生のあやうさ」に根ざす平和教育の再構築に向けて－」『研究室紀要』第 42 号、東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室、2016 年、7 月、239-247 頁
琉球新報社編「改姓改名運動」『沖縄コンパクト事典』琉球新報社、1998 年、9 月、107 頁

図・写真の出典

図　1：石野 1950 の表紙・背表紙・裏表紙から転載（筆者所蔵本）。
写真 1：那覇市歴史博物館「泊尋常小学校職員と生徒」『デジタルミュージアム』より転載、那覇市歴史博物館提供。
写真 2：那覇市歴史博物館「泊尋常小学校校舎と生徒」『デジタルミュージアム』より転載、那覇市歴史博物館提供。
写真 3：筆者所蔵。
写真 4：那覇市歴史博物館「元泊国民学校（南側より撮影）」『デジタルミュージアム』転載、那覇市歴史博物館提供。

（なかやま・ゆたか　玉川文化財研究所主任研究員）

The Origin of the Novel “Himeyuri no Tou (Himeyuri Monument)” : March 10, June 26, and August 15, 1945 (Showa 20) in Ishino Keiichiro’s Diary

NAKAYAMA Yutaka

Abstract

Recently, I came into possession of the diaries from 1945 and 1982 of Ishino Keiichiro, a novelist who graduated from Hosei University and is known as the author of the novel “Himeyuri no Tou（Himeyuri Monument）”.

Of these, the 1945 diary is a record left by Ishino at the time, and is a valuable resource that is the starting point for Ishino’s Okinawan literary works, including the novel “Himeyuri no Tou” The 1982 diary also contains information about events from 1945 that are not written in the 1945 diary, so it was thought that it could be treated in the same way as the 1945 diary. The historical value of diaries, which are personal records, is already known, but it goes without saying that these Ishino Keiichiro diaries are also valuable resources for the modern history of Okinawa and Japan.

In this paper, I will report on the entries from Ishino’s diary for March 10, June 26, and August 15, which I believe are important in understanding his Okinawan literary works. Ishino’s 1945 was already known from his “Chronology” and “Himeyuri no Kuni（Himeyuri Country）” but by reading these entries in conjunction with the diary entries introduced in this paper, I was able tolearn about the environment and situation Ishino found himself in at the time, as well as his thoughts and feelings.

Until now, it could be interpreted that Ishino’s entire family evacuated to Komatsu City, Ishikawa Prefecture after their house was burned down in the Great Tokyo Air Raid on March 9th, but it has been confirmed that his wife and children had evacuated before that, and that Ishino himself had left Tokyo just before the Great Tokyo Air Raid that burned down his house. It was also confirmed that the day the Battle of Okinawa ended for Ishino at the time was June 26th, and by reading it together with “Himeyuri no Kuni” we were able to more clearly touch upon the origins of Ishino’s literature on the Battle of Okinawa. There we see Ishino grieving over Okinawa through memories of his father, other family members, and his mother who he left behind in Okinawa. It was revealed that on August 15th, in the midst of the hustle and bustle immediately after the death and funeral of his father-in-law, Ishino was listening to the Emperor’s radio broadcast at Kanazawa Station, where he was on a business trip. It was also pointed out that the landscape painting used on the cover of the novel “Himeyuri no Tou”, which was first published in book form by Yamagabo, may have reflected Ishino’s thoughts.

Keywords : novel “Himeyuri no Tou”, Ishino Keiichiro’s diary, 1945（Showa 20）, Battle of Okinawa, Great Tokyo Air Raid, evacuation, Emperor’s surrender broadcast, parents